

軍国主義というバイアグラに訴えるアメリカ

By Finian Cunningham

May 31, 2015 (Information Clearing House)

アメリカの振舞いは、あと命わずかとなった暴君の典型的な反応である。あるいは自分の目の前で崩れ落ちるのを見ている帝国である。それは、自分の没落を否定して、今のところまだ恐ろしい軍事力を振り回し、今は見る影もなくなったかつての精力旺盛の巨人が、文化、道徳、経済、政治など、他のすべての分野のインポテンツを補おうと、賭けに出ている。

変わっていく世界の現実に潔くお辞儀をして退場する代わりに、ワシントンは、軍国主義をバイアグラのように用いて、避けられないものを先延ばししようとしている。

第一次大戦のあと、アメリカの世界的リーダーシップは、疑うべくもなかった。「パックス・アメリカーナ」——アメリカの金融・政治力の下の世界秩序——は最高の統治力をもつように見えた。しかしそのような全盛期でも、よりすぐれた鑑識眼のあるアメリカの計画者には、先の困難が見えていた。

1948年に書かれ、1974年に極秘でなくなった秘密メモ、PSS/23の中で、著名な米 국무省政策立案者ジョージ・ケナン（George Kennan）は、やがて現れる地球的秩序、特にアメリカのアジアとの関係について、こう言っていた——

「アジアにおいて“リーダーシップ”を行使するというとき、我々は大いに気をつけなければならない。我々が、これらアジアの様々な人々の心を動かしている問題への、答えをもっているかのように振る舞うとき、我々は自分も思い違いし、他者をも騙している。その上、我々は世界の富のほぼ 50%をもっているが、人口は世界の 6.3%にすぎない。この不均衡は、我々自身とアジアの人々の間で特に大きい。我々は、曖昧な——そして極東の人々にとっては——非現実的な、人権、生活水準の向上、民主化といった問題を論ずるのをやめなければならない。我々が率直な権力概念を取引きしなければならなくなる日が、遠からずやってくる。観念論的なスローガンに捉われないほど、よいのである。」

ソ連に対する“封じ込め”という冷戦政策を論じたケナンが、思い上がった“アメリカ例外

思想” (American Exceptionalism)、自然のリーダーシップ、観念論などに捉われているのを見るがよい。

にもかかわらず、ケナンの言葉に見られる覚めた見方は、アメリカの経済的支配が不均衡で、このまま続くものではないことを理解している。彼は、資源と人間的必要物に内在するこのような不均衡は、その格差を維持しようとするれば、ますます暴力的な権力に依存しなくてはならなくなることを、気持ちよく率直に認めた。

ケナンの言葉を繰り返すなら——「我々が率直な権力概念を取引きしなければならなくなる日が、遠からずやってくる。我々は観念的なスローガンに捉われないほど、よいのだ。」

実際、その日はすでにやってきているようだ。ほとんどあらゆる大陸において、アメリカは外交という見せかけを放棄して、なまの、一方的な軍事力を用いて、その正当化されない思い込みの支配権を主張しようとしている。

ワシントンの、ベネズエラ、イラン、ロシアに対する——ロシアの場合、前例のない NATO の戦争策動による——制裁と脅しは、その主たる例である。先週のスイスにおける FIFA フットボール役人の腐敗とされるものを、アメリカの法執行局の命令によって調停した事件は、いかにワシントンが、外国の法廷に関係なく、自分の意思を押し付ける大権をもつと自認しているかの、もう一つの例である。

アメリカの悪化する中国との関係は、アメリカが地球的覇者のように振る舞う、自称“明白な運命” (manifest destiny=米白人の西部開拓を神の定めた運命とする思想) の最も新しい現れである。

先週末、米国防長官アシュトン・カーターは、中国とそのアジアの隣人たちとの領有権争いという微妙な問題に介入した。アシュトンの行動は、裁判官気取りの行動だった。彼は、中国は南シナ海におけるすべての埋立て計画を、直ちに中止せよと要求した (demanded)。

ほんの数週間前、米國務長官ジョン・ケリーも北京を訪問して、同じような高圧的な要求をした。かつて米海軍大将 Harry Harris は、中国が南シナ海に“砂の長城”——戦略的に重要な地球的貿易通路——を建設していると言って叱りつけたことがある。

ワシントンは、ますます公然と、かつての“中立的調停者”のイメージを捨てて、挑発的なゲリラのような立場を取るようになり、中国の軍国主義と拡張主義は、アメリカの地域的同盟者であるフィリピン、インドネシア、日本を脅かすものだとして非難している。更新され

た“防衛協定”は、パートナーの「致命的利益が脅かされた」とときには、彼らを「保護する」ために戦争をする自動的「権利」を、アメリカに与えることになっている。

アメリカの海軍、空軍機、ミサイル装置などが、「パートナーを保護する」という隠れ蓑のもとで、ますます広く展開されるようになり、領土紛争の軍国主義化がますます激しくなっている。

中国は中国で、その領域の彼らの軍事的プレゼンスは、広範囲な貿易ルートを保護するためだと言う。北京政府は、彼らが厳密に自国領内だという、砂州やサンゴ礁での海洋開発計画を中止することを、きっぱり拒否している。

ワシントンの最近の最後通牒に対し、駐米中国大使の崔天凱は、ワシントンがこの地域の緊張を高め、それをますます「不安定」にしているやり方に、中国の警戒感を表明した。

崔はウォール・ストリート・ジャーナルに、アメリカの要求は「我々にとって非常に大きな驚き」だったと話した。大使は更に加えて「アメリカはこの状況に過剰反応し、情勢をエスカレートしている」と述べた。

中国の困惑は十分に理解できる。ワシントンは、北京のこの地域での「軍国主義」を非難するが、最近、中国領海を軍艦と偵察機によって侵犯し、「この危機を挑発しエスカレートするような試み」を行ったのはアメリカだ、と崔は言った。

この中国外交官は加えて言った——「しかも、アメリカは多くの声明を発して、中国に対する虚偽の告発をし、この地域の領海紛争の一方に立つようなことをしている。それはこの領域の問題をますます不安定にするもので、我々はアメリカのそのような過剰反応に困惑している。」

ここでロシアとの類比が目立ってくる。アメリカとその NATO 同盟国は、ロシア領域周辺——バルト海から黒海、その中間——で、規模と頻度をますます大きくして、数多くの「戦争ゲーム」を行っている。にもかかわらず、ワシントンはこの挑発の現実を逆さまにして、モスクワの軍国主義と拡張主義を非難している。

ロシアの外務大臣セルゲイ・ラブロフが言ったように、ワシントンの問題の中心にあるのは、彼らが、変わりゆく世界の多極的性格と、折り合いがつけられないことである。世界最大の経済大国としての中国の台頭と、そのアフリカ、アジア、ラテンアメリカにおける拡大する経済的プレゼンスは、ロシア、インド、その他の台頭する国家群の増大する重要性と、歩調

を合わせて動いている。中国が特に力を入れている地球的貿易の新しいシルクロードは、アメリカが地球権力の中心としての役割を、縮小しつつあることのしるしである。

自分自身の没落に直面することができないワシントンは、軍国主義というバイアグラに訴えて、現実にはもはや持ってない、男性の力のイメージを演出しようとしている。

多極的世界が、貿易と投資の合法的な諸関係と諸事情のもとで、形成されつつある。こうした変化を非合法的と見ているのは、老衰したアメリカと、それにぶら下がるヨーロッパ同盟国だけである。それは主観的で政治化された見方である。新しい地球的現実を受け入れる代わりに、ワシントンは、それがライバルと感じているもの——特にロシアと中国——との対決を考案することによって、避けられないものを先に延ばそうとしている。

あるいは、アメリカの政策立案者ジョージ・ケナンが 1948 年の昔に認めたように、ワシントンはいま、民主主義とか人権といった虚構の概念を捨てた結果、必然的に、なまの権力概念、つまり軍国主義を取引きしようとしている。

しかし、そのきわめて現実的な危険は、アメリカの資本主義が陥った高齢化した力が、自分自身の没落の向う見ずの否定から、世界戦争を引き起こしかねないということである。

誰かがバイアグラを取り上げて、そのコカのカップに、鎮静剤をそっと入れてやる必要がある。